

文部省検定済教科書

153	現 国
角 川	418

高等
学校

現代国語 一

改訂版

角川書店

昭和47年4月10日 文部省検定済 高等学校国語科用
昭和50年4月10日 改訂検定済

久松潜一
吉田精一 編
佐藤謙三

高等
学校
現代国語一

改訂版

角川書店

編集委員

東京大学名誉教授	久松潜一
大妻女子大学教授	吉田精一
国学院大学教授	佐藤謙三
(別記著作者)	
立教大学教授	宇野義方
神奈川県立西湘高等学校教諭	岡本豊
実践女子大学助教授	佐藤昭夫
専修大学教授	関良一
東京都立西高等学校教諭	細窪孝
立正女子大学助教授	森島久雄
東京都立文京高等学校教諭	渡辺剛志
香川大学講師	渡辺正彦

高等学校 現代国語 一 改訂版

昭和五十一年一月十五日 印刷
昭和五十一年一月二十日 発行

著者 久松潜一
吉田精一
佐藤謙三

ほか八名(別記)

発行者 東京都千代田区富士見二の二三の三
株式会社 角川書店

代表者 角川源義

印刷者 東京都台東区台東一の五の一
凸版印刷株式会社

代表者 澤村嘉一

発行所 株式会社 角川書店

東京都千代田区富士見三の二三の三
振替口座 東京一九五二〇八番
郵便番号 一〇二番
電話 東京(〇三)七一一(代表)
◎ (本書の解説書・ワークブックならびにこれに類するものの無断発行を禁ずる)

「定価 文部大臣が認可し官報で告示した定価
(上記の定価は、各教科書取次供給所に表示します。)」

153	現国 418
角川	

目次

一 人間を見つめて

わたしと飛行機

立ち読みの楽しみ

二 詩と生活

ふるさと 夏の朝

くらかけ山の雪 曠原淑女

朝

掌の中の卵

詩を読む若き人々のために

三 自己を語る

一方話

隨筆・小説

古在由重

曾野綾子

詩

室生犀星

宮沢賢治

中原中也

壺井繁治

ルース・深瀬基寛訳

聞く・話す

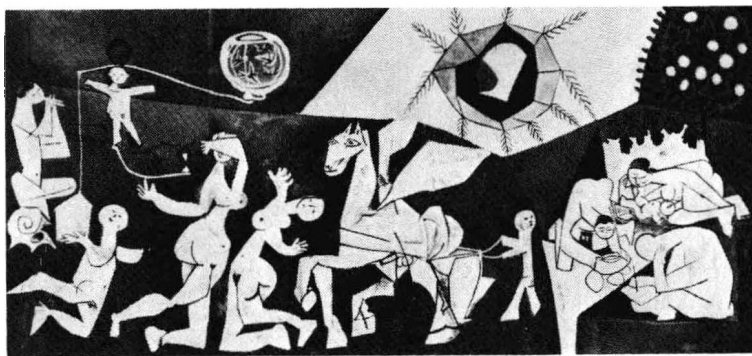
大石初太郎

目次



目次

○ 発表・説明	
「講演」本との出会い	白井吉見 六
四 美の発見	評論 小林秀雄 六
美を求める心	
五 小説(一)	小説 開高健 二〇
太 郎——「裸の王様」より	
大騒ぎ	チエホフ 池田健太郎訳 二三
六 自然から歴史へ	報告 亀井節夫 二四
日本に象がいたころ	
七 私たちの文章	書く 庄野潤三 二五
実のあるもの——わたしの文章作法	
友	(生徒作品) 二六
○ 何を書くか	二七



八 近代の短歌

川ひとすぢ

短歌

与謝野晶子 一七六

ほか

九 認識への出発

初めに行動があった

コンピューターの論理

論説・評論

高階秀爾 一六六

遠山 啓 一九九

十 小説(二)

十一月三日午後のこと

雛

小説

志賀直哉 三三四

芥川龍之介 三三七

十一 ことばと人間

言語の構造と機能

人間をすることは ことば

を作る人間

言語

服部四郎 二八六

大野 晋 二八三



目次

十二 演劇

夕鶴

戯曲

木下順二 二七四

十三 時代と表現

学問のすすめ

論説・評論

福沢諭吉 三〇〇

新しき詩歌の時——「藤村詩集」序

島崎藤村 三〇六

近代の夜明け

吉田精一 三二〇

付録

口語文法のあらまし(一)

三三

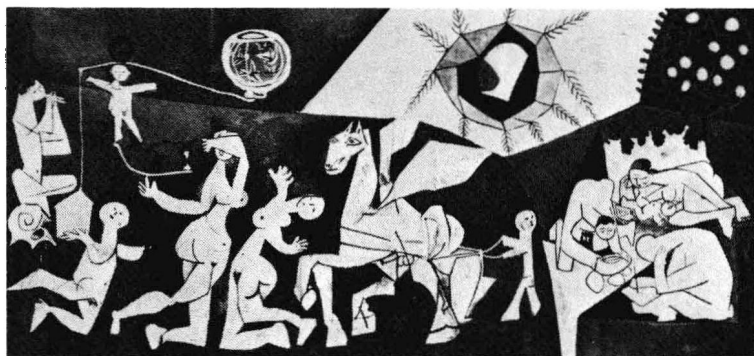
符号の用い方

三四

日本近代文化史年表

三六

目次カット／戦争と平和／ピカソ画

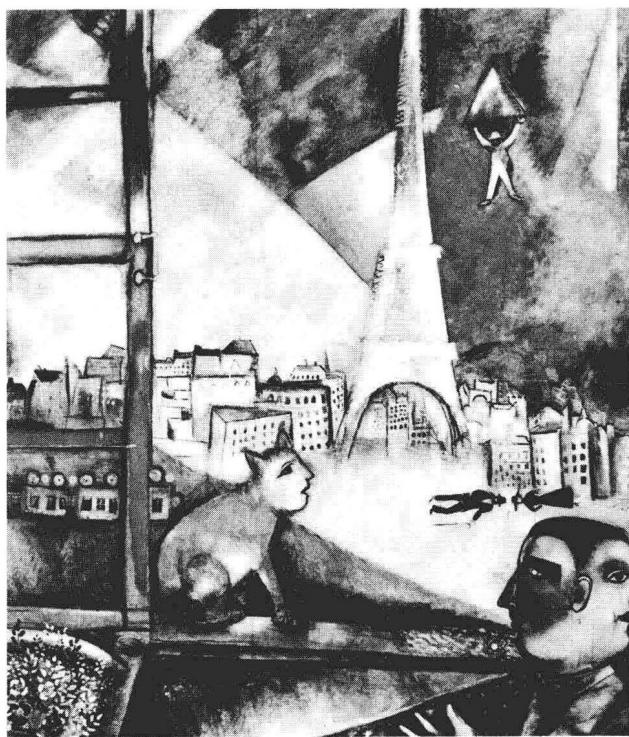


一 人間を見つめて

— 随筆・小説

わたしと飛行機

立ち読みの楽しみ



窓から見たパリ（部分）

シャガール画

人間を見つめて

六

わたしと飛行機

古
在
由
重

(1) 一八六—一九三

歌人、詩人。歌集
「一握の砂」「悲し
き玩具」、詩集「あ
こがれ」などがあ
る。

ここに掲げた
「飛行機」は、詩
稿ノート「呼子と
口笛」に収められ
ている。

「飛行機」と題する啄木(1)たぐの詩がある――

見よ、今日も、かの蒼空あおぞらに
飛行機の高く飛べるを。

給仕づとめの少年が

たまに非番の日曜日、

肺病やみの母親とたった二人の家にて、

ひとりせつせとリイダアの独学をする眼めの疲れ……

見よ、今日も、かの蒼空に

飛行機の高く飛べるを。

(2) parachute
(フランス語)。落
下傘。



わたしと飛行機

東京の近郊とはいえ、まったくの農村に育ったわたしは、思えば、何一つ新しい文明の遊びも知らずに少年期を過ごした。まだ電話はもちろんのこと、電燈もなかったし、自動車を見たこともなかった。昼は青空のもので、夜はランプの陰で過ぎてゆく平和な日々だった。裏の小川でめだかや鮒や蟹をとり、松林では蟬をつかまえた。みんなで紐を巻きつけた独楽を地面に投げつけて回し、神社に集まって木登りをし、ときに大きなからかさによら下がつて櫂の枝から飛び降りた。幾つもの糸をつけた、薄紙のパラシュートのような紙風船を丸めて空へ投げる。ときにはそれがうまく風に乘って広がり、高く高く上がって、屋根を越え木々を越えて飛んでゆく。行方もわからない遠方へ。よく風を作って空へ上げることもした。高く空へ舞い上がった風は、かまぼこ板に巻きつけた風紐を強く引っ張り、紐は寒さにかじかんだわたしの指に食い込む。ときには紐をちぎって、風にあおられて風はどこか遠方の空へ姿を消してしまうこともある。いったいどこへ？ まったく神秘的だった。

風上げはわたしの最も好きな遊びだった。しかしいつ

人間を見つめて

八

(3) gondola
飛行船・気球・空中ケーブルなどからつり下げた人間の乗るかじ。

(4) 原著名「二年間の休暇」(ハ六)。フランスの作家ジュール・ベルヌの小説。ブリアンは主人公の少年の名。無人島から大風に乗って脱出した。

(5) varnish 家屋・木製品などに塗る塗料の一種。ニス。

(6) フランス人ルイ・ブレリオが設計・製作した初期の単葉機。こ

かは、ゴンドラ³を下げた大きな風を作って、わが身も高い空へ昇ってみたい！　これがわたしのほのかな夢だった。

空へのあこがれ、だれかが名づけた人間のこの本能的な「高空衝動」というものは、ほんとうにあるのだろうか？　わたしが「十五少年」のブリアンに夢を託していたころ、ちょうどそのころ日本の航空界はそのスタートを切りつつあった。どんなはずみからか、古いはがきを翼や胴体の形に切って、糊でそれらをつなぎ合わせて飛行機を作り、毎日のようにわたしはそれを木の上や屋根の上から手で飛ばした。その頭の所には、折り曲げたブリキの小片がつけてある。着陸の地点には木の小枝の標識を差し込み、これが次第に遠方へ進むのがうれしかった。竹ひご、美濃紙^{みの}、にかわなど、あるいはワニス^{ニス}、細い鉄鋼の針金、絹布、アルミの小車輪などで機体を作り、木製のプロペラとゴム紐の動力をつけて、模型飛行機を飛ばし始めたのは、そのあとのことである。これが地上の滑走からふんわり飛翔^{ひしやう}へ移るのは、なかなか難しい仕事だった。それでも、とにかく夢中の毎日だった。生まれてはじめて徹夜というものを経験したことを、思い出す。

想像の世界はどこまでも膨らむ。いつかは自分も本物の飛行機を製作、操縦をやろう。こんな決心をはっきり固めたのは、小学六年生の時だった。一九一三年の忘れもせぬ三月二十八日、わが国はじめての飛行機墜落の事件が起こったのである。そしてそのとき陸軍

の機種によりはじめて英仏海峡横断飛行(二六五)に成功した。

(7) 一八五—一九三

旧陸軍の歩兵中尉。

(8) 一八六—一九三

旧陸軍の砲兵中尉。

(9) 埼玉県南部の市。日本最初の飛行場があった。

(10) 京都市伏見区北部の地名。当時練兵場があった。

(11) 一八六—一九三

飛行家。大阪—京都間飛行を試み、着陸の際墜落した。日本の民間飛行家最初の犠牲者。

(12) アメリカ人

グレン・カーティスによって設計・製作された初期の飛行機。

のブレリオ式単葉機に乗っていた徳田金一、木村鈴四郎の両中尉が所沢飛行場近くの麦畑で壮烈な最期を遂げた。まったくショックな事件だった。それ以後、一年間ほどは毎晩のように、わたしは機体が空中で分解し散乱してばらばらに舞い落ちてゆく夢を見ていたような気がする。さらにこの事件の衝撃に追い打ちをかけたのは、その一か月余りのちの五月四日、京都の深草練兵場での武石浩玻の墜死である。これは、今や着陸体勢をとつたままでのカーティス式「白鳩号」の地上激突によるものだった。「民間飛行家」武石とすることが、どういうわけか、特に胸をついた。

それから、まもなくのことだったろう。ある夜、わたしは飛行家になる決意を母に告げることになった。薄暗い部屋の布団の中に、そのとき胆嚢炎で高熱を出して母は寝ていた。枕もとに座って、恐る恐るこの決意を伝えるわたしの顔を振り向いて、あっさり母は言った——「重さんかえ？ やりたいことをやりなさい。」ほっとした。うれしかった。やるぞ、とわたしは心を弾ませた。

思えば、この世紀の一〇年代にはいろいろな大事件があった。しかしこれらすべては、小学時代から中学時代へかけてのわたしの頭上を雲のように通り過ぎていった。中学卒業までわたしの心は、野球やランニングのほかは、もっぱら飛行機にとらえられていた。当時はまだ店頭に見えなかった本や雑誌の記事をけんめいに探した。

(13) 一九一三年(大正三)に創刊号が発行され、ほぼ大正年間続いた航空雑誌。

(14) idol 偶像。

崇拜されるもの。

(15) ドイツ、オーストリアなどの同盟国と、イギリス、フランス、アメリカなどの連合国との間に戦われた。一九一四年—一九一八年。

製図用の器具を備えて、わたしはグライダーや飛行機の設計図のまね事みたいなものを大きな画用紙に描いては、毎日のように楽しんだ。自分の文章が、生まれてはじめて活字になったのは中学三年の時だったことを思い出す。それは「飛行界」という雑誌へ投稿した文章であり、グライダーについてのものだった。

これほどまでに少年期のわたしの最大のアイドルであり続けた飛行機。かつては自分の一生をささげるつもりだったあの飛行機。第一次世界大戦が終わって旧制の高等学校理科へ進むころ、それなのにこの情熱がわたしの体内でいつしかさめ始めたのは、なぜだったのだろう？ 今でも、わたしにはよくわからない。確かに、それにつなげて勉強したはずの数学や物理学への関心のほうが、いつの間にか主座を占めるに至ったからかもしれない。さらに、あこがれの飛行機が第一次世界大戦の時——日本のそれをも含めて——はじめてあからさまに軍事に使われたこと。これは事実である。しかし、もしそうだからといってわたしの体内の熱が冷えていったのだというならば、それはやはり誇張にすぎるだろう。ただ、こういうほかに道はなさそうである。つまり、幼い日からの無限のロマンチックな夢をはらんだものが、なにかよそよそしい散文的な現実となり、長くわが胸に秘めていた初恋にも似た気持ちも——知らぬまに——薄れていったのだ、と。

(16) 一九五六年に製作されたアメリカ映画。

(17) Charles Augustus Lindbergh (1903—1990) アメリカの飛行家。一九二七年、単独で最初の大西洋横断無着陸飛行に成功した。

(18) Hugo Eckener (1869—1954) ドイツの飛行家。ツェッペリン号による世界一周飛行の際の船長。

(19) ドイツ人ツェッペリン (1868—1937) によって一九〇〇年に建造された硬式飛行船。



号「セントルイス精神」のリンダーバーグに成功した大西洋横断

もちろん、わたし自身の側にも幾つかの変化は起こっていた。わたしの関心も飛行機設計から自然現象の理論へ、そしてさらに後には抽象的な哲学へまで変わっていった。しかしそののちも、大空へのあこがれ——初恋の懐かしさを完全に忘れ去ってしまったわけではない。「翼よ、あれがパリの燈だ」の映画でも知られるリ

ンダーバーグによる一九二七年初夏の大西洋無着陸横断は、久しぶりにわたしの心を波立たせた。さらに、その二年後の一九二九年、ドイツのエッケナー博士が世界一周の旅のため銀色の巨大な飛行船「ツェッペリン号」に乗って日本を訪れたとき、もう一度わたしの胸は高ぶった。思えば、それは久しい飛行船の歴史の終末の栄光だった。それが東京の空に雄姿を現したのは、真夏の日盛りのことである。裸のまま、わたしは家の屋根の頂上に立ち、一人で双手を上げてその成功を祝福した。女子大学の休暇明けの最初の授業時間の初めに、クラスの学生たちからまず暑中休暇の感想談をせがまれてこの話をしたとき、意外にも爆笑で迎えられたのが忘れられない。炎熱の屋根瓦、裸の哲学の先生、空行く飛行船……。わ

(20) 一九三一年、日本と中国の間に起こった武力衝突、満州は中国の東北地区の旧称。

(21) 第二次世界大戦のうち、主として太平洋方面における日本とアメリカ、イギリス、オランダなどの連合国軍との戦争。一九四一年—一九四五年。

(22) 日本、ドイツ、イタリアなどの枢軸国と、アメリカ、イギリス、フランス、中国などの連合国との間に、世界的な規模で行われた大戦争。一九三九年—一九四五年。

たしの過去を知らない人たちに、この取り合わせが奇妙に見えたのも無理もないけれど。

しかしさらにその二年後には、大戦への導火線の一つとなった満州事変が始まる。それはついに太平洋戦争へ広がり、第二次世界大戦に巻き込まれてゆく。そして今度こそは無数の爆撃機や戦闘機がこの近代戦における恐るべき主力の一つとして登場した。ドイツの「メッサーシュミット」やイギリスの「スピットファイア」などの高性能の戦闘機。日本軍の誇った「ゼロ式」戦闘機。そしてわが国にも猛威をふるったアメリカ軍のB29——「ボーイング」戦略爆撃機など。ああ、かつて数十年前には新しい世紀——あたかも二十世紀のあけぼのを告げるかと予感されたもの。あのあこがれの対象の正体は、実はこのようなものだったのか？ かつてその揺りかご時代には、未来における人類の無限な自由と幸福を約束するかのように見えたもの。あの美しい姿を、飛行機よ、きみはいつなくしてしまったのだ？ ほのぼのとした希望と予感の陰にひそんでいたのは、実はこんなすさまじい怪物であったのか？

あの太平洋戦争のさなか、B29編隊の襲撃のもとで、狭い庭の片すみに掘られた防空壕に身をひそめていたとき、突然このような実感がまっくらな穴ぐらでわたしの体内にこみあげてきた。さっきまで青い秋空に泳ぐ魚群のように見えていたB29の編隊。今やこれがわれわれの頭上に来て、そこら一面に照明弾、爆弾、焼夷弾が炸裂する。恐ろしい緊張、

恐怖のひとつとき。

(23) ドイツ人ウィルヘルム・ローメッサー・シュミットによって設計・製作された戦闘機。

(24) 一九三六年に製作された戦闘機。

(25) 零式艦上戦闘機。一九三九年に製作された。

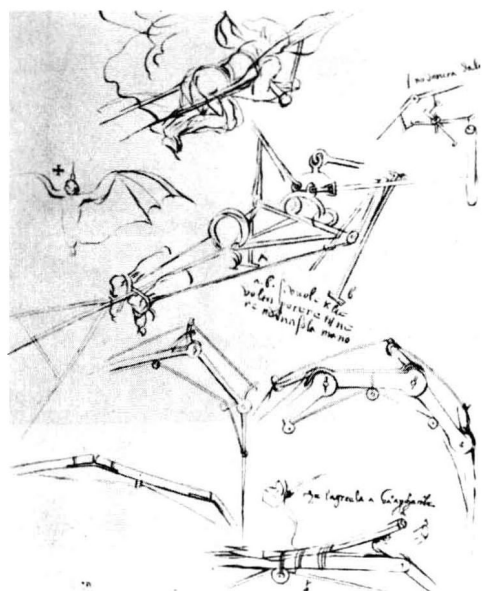
(26) 一九二四年初飛行。長距離爆撃機。

(27) Leonardo da Vinci (レオナルド・ダ・ヴィンチ) 一五九。

イタリア文芸復興期の画家、建築家、彫刻家。多才で飛行機的设计も試みている。

(28) Wilbur Wright (ウィルバー・ライト) 一八六九—一九一六。

Orville Wright (オリバー・ライト) 一八六九—一九一六。



ダ・ヴィンチの飛行機の細部スケッチ

少年のころ、おそらく十七、八歳ごろまで、寝てもさめても忘れられなかったこの最愛のアイドル。いま目に見るこの恐ろしい相貌は、そもそも意外の変身であるのか、それとも、もともとの正体だったのか？ 鳥のように大空を飛びたい、飛ぶことができる——⁽²⁷⁾ダ・ヴィンチの設計図にも見られるように、この願いは実現へのほのかな期待として生まれ、そしてやがては確信となった。初めには人類の純粋な好奇心だったもの。たくましい冒険

欲だったもの。ダ・ヴィンチから四世紀ののち、それが⁽²⁸⁾ライト兄弟の成功によってついに実現したとき、すでにそのときはその前方には鉄のレールが敷かれていた。

航空史の夜明けへの近年の回顧には、何か詩とロマンを求める現代人の願いがひそんでいたのでなかろうか？ 超音速機の開発にもかかわら

アメリカの飛行機製作者。一九〇三年に人類最初の動力による飛行に成功した。

(29) 一九七二年

(30) 一九三〇。香

川県小豆島に住む自動車整備士。

(31) 香川県の県庁所在地。

(32) 一九三一。イギリスの航空技師。

(33) 一九八一。折り紙作家。著書に「楽しい折り紙飛行機」などがある。



折り紙の飛行機を飛ばす子供たち

ず、今日なお自家製の小型機に執念を燃やす人もある。洗濯機や自転車などの幾つもの部品や廃品を組み立てて、この四月末に向井功さんの四十馬力、翼長一二メートルの小さな「オリーブ号」は、高松市の空を飛んだ。高度三〇メートル、距離五〇〇メートル、時間三十七秒だった。応援の少年たちは叫んだ——「おじさん、がんばってよお！」。さらに、エンジンすら使わぬペダル式飛行機、「空飛ぶ自転車」への挑戦も、今なお絶えない。毎日八キロのサイクリングの訓練によって脚力を鍛え上げたイギリスのJ・R・ウィンペニは、十年ほど前にこの人力飛行機で離陸に成功した。記録は高度二メートル半、距離九〇〇メートル余りにすぎなかったけれど。いや、わが国にもいる。「ヒコキ野郎」で有名な東京の中村栄志さん⁽³³⁾もやはりサイクリングで脚を鍛えて、人力飛行機に挑戦している。確かその訓練の途中だったか、残念にも交通事故のため負傷された。ただ、入院中に一枚の折り紙で作り始めた「紙の飛行機」は、次第にその数と型を増していった。そして最近、外国